

G. Greene 研究

Innocence of Anthony Farrant

—その2—

宮野祥子

(承前)

IV

*

さてこの章においては、II章において考察したように、<innocence>とは相容れないような存在である Anthony を、それにもかかわらず <innocence>ということばで語っていることについて、III章でのべた Greene の云う <innocence> を参照しながら、考えてみたいと思う。

作者は Kate に Anthony の言動を <absurd innocence> <blank innocence> <depraved innocence> ということばで云い表わさせているのであるが、<absurd innocence> については、Anthony の子供っぽさとして表われている望郷を手がかりに、Pyle の子供っぽさと比べながら、<blank innocence> については、Anthony の内部の虚無の反映として、またそれを具象化する演技ということについて、Pyle の無自覚な <innocence> と比べながら考えてみたいと思う。さらに <depraved innocence> については、墮落ということについて、そしてさらに模倣に伴なう道化性を手がかりに、*The Comedians*¹⁾ の一人物 Jones の道化性と比べながら、考えてみたいと思う。では、まず Anthony をこのようなことばで云い表わす Kate の判断の底にある視点はいったいどのようなものであろう。

Anthony と同様に、Kate は、誇りと名誉と愛と血族を重んずる、典型的な中流階級の英国人としての教育を受けた女性である。しかし彼女はそのような英国人としての意識は捨て去り、国際人 <we're internationalists there, we haven't a country.> (p.6) として、祖国を捨てて生きることを望

んでいる。彼女は英国人であるよりも、まず社会のなかで、現実的に陽のあたる場所を求めているのである。ほこりっぽいロンドンの薄汚れた小さな会社で働いているよりは、彼女の能力と教養をより充分に活かし、彼女の望むような待遇が得られるならば、英国以外の場所へでも彼女はためらうことなく移っていくことができるのである。それは、彼女がまず何よりも望んでいること、ろくでなしの弟 Anthony を側において面倒を見られる社会的な地位と実力を得ること、を可能にするからである。こうして故国を捨てようとしている Kate は、二つの風景をつなぐ暗いトンネルとして描写されている。

Her dusty righteous antecedents pulled at her heart, but with all her intellect she claimed alliance with the present, this crooked day, this inhumanity; she was like a dark tunnel connecting two landscapes, on one side the huddled houses, the backs with their washing and their splintered window-boxes, on the other— (p. 171)

(彼女の塵まみれの廉潔な先祖達が、彼女の心を引き止めるのだけれど、彼女はあらゆる知力を用いて、現在、このねじ曲った奇型の時代、この非人間性と与みすることを主張する。彼女は二つの風景をつなぐ暗いトンネルのようだ、一方の側には家々がごたごたとかたまり、裏手には洗濯物が干され、割れた植木箱が並べてある。もう一方の側には——)

一方の風景として、彼女が捨てようとしている、見すばらしくほこりっぽい、しかし廉潔な先祖達の住む場所があり、もう一方として、捩じ曲った非人間的な、しかし繁栄している場所がある。一方は捨てようとする英国という過去であり、他方は彼女があらゆる知力を用いて選びたいと願う現在である。その現在とは、実業家 Krough に属する世界であり、モダンなガラスと鋼鉄の建物 (p.36) で象徴されるような、冷たく非人間的で、しかも不正な <crooked> ことも容認される企業の世界である。そこでは企業が存在を脅かすような要素は容赦なく抹殺されるのである。Kate はこ

の世界で、社長 Krough の秘書兼愛人として生きることを選ぶことによって、不正と非人間性を容認し、肯定せざるを得ない立場に立っているのである。このような Kate から見れば、Anthony は世の中の危い橋を巧みに渡り、<傷つくことなく>(p.26) けちな危険<shabby adventures> (p.26) を数多く潜り抜けて来てはいても、彼はまだ幼く子供ぽいとしか云いようがない存在なのである。Anthony は33才になっても Kate が苛立たしく思うほど、外貌もいつまでも schoolboy のようであり、どこかで成長が止まってしまったような零囲気がある。そのような Anthony を、Kate は異常なほどの愛しさを感^いじながら <absurd innocence> ということばで云い表わしているのである。

His face, she thought, is astonishingly young for thirty-three; it is a little worn, but only as if by a wintry day, it is no more mature than when he was a schoolboy. He might be a schoolboy now, returned from a rather cold and wearing football match. His appearance irritated her, for a man should grow up, but before she could speak and tell him what she thought, her tenderness woke again for his absurd innocence. For he was hopelessly lost in the world of business that she knew so well, the world where she was at home; he had a child's cunning in a world of cunning men: he was dishonest, but he was not dishonest enough. (p. 6)

(彼の顔は、と彼女は思った、33才にしては驚くほど若いわ、少しやつれているけれど、でも今日は寒いからそう見えているだけみたい、学生時代からちっともおとなになっていないみたい。今でも学生みたいなのかも知れないわ、フットボールの試合から寒い思いをしてくたびれて帰ってきた学生みたいに。彼のその外貌が彼女を苛立たせた。男というものは成長すべきなのだから。だが彼女は自分の思いを口を開いて云うまえに、彼のつじつまの合^いわない無邪気さを、また愛しく思う気持がめざめてくる。というのは彼女が良くわきまえている世界、彼女が気楽に居られる実業界にあって、彼はどうしようもなく途方にくれているからだ。悪賢い大人の世界のなかで、彼には子供のずる賢さがあるだけなのだ。彼は不正直だ、だ

けど大人ほど不正直ではないのだ。)

Anthonyは<巧狡であった>り、<不正直であった>りする、けれどもそれは Kate の居る世界にあっては、途方にくれてしまうような限界のある悪賢さなのである。それは Kate によれば、一人前としては認められない子供の悪知恵でしかない。例えば Krough の企業上の秘密を知った Anthony は、Krough を脅迫し、その金で Kate と英国に帰ろうと考えるのであるが、Kate はそのことが<プラムを盗むこと> (p.177) ぐらいの軽い悪戯であるかのように考えられているのを知って、彼のその発想の単純さ、幼稚さは、どうしてもなく<innocent> (p. 177) であり、彼には<自分の立場が理解されていない> (p.177) と考えるのである。Kate の眼にうつる Anthony のこのような単純さ、幼なさを最もよく実証するのが Andersson の事件である。Anthony のためなら、敢えてどのようなことでも成し遂げようとする Kate と違い、Anthonyは Kate のためにさえ、どうしてもしようとしないうこと (p.223) がある。いわゆる Andersson の事件はそのことを明らかにしているのである。

反動的な思想の持主であるとして解雇された父のために、直接に Krough に会いに来た Andersson を、ホテルの玄関先で追い帰すよう、用心棒である Anthony に Krough が命ずるのである。この命令に<I'm damned if I will.> (p.215) と、頑として応じなかった Anthony は次のように云っている。

'It's not respectable. The other night. What was wrong with Andersson? I won't do their dirty work. There are things I won't do.'
(p.229)

(「品が良くないよ。この間の晩なんか。アンデルセンのいったいどこが悪いのかい。僕には会社の汚れた仕事なんかする気はないよ。僕にだって、どうしてもやらないということがあるんだ。」)

ここで Anthony が Krough の仕打ちに対して用いている、<dirty

work>とか<not respectable>という道徳的な判断を表わすことばは、彼の行動にブレーキをかける赤いライト (p.178) である。今まで世の中という網の目をくぐり抜けて生きのびてきた Anthony にとって、出来ないことはなく、彼は真直ぐな軌道を走り続けている (p.178)。しかし彼はどこかで走り止めるところがある。彼の行動を抑制するこの赤いランプ、すなわち道徳的な規制は、<the conventions of a generation older than himself> (p.24) という、彼より古い世代の生活態度によって、彼に教えられたものである。だから、Anthony の Krough の世界に対するこうした批判は、英国への郷愁、しかもその郷愁は英国にしか生きる場所はないという、彼の生き方として選択されているのではなく、英国に帰った恋人 Loo の思い出や、<the whores in Wardour Street>の顔なじみを思い出すことによってかきたてられる郷愁 (p.229) に支えられている、その場かぎりの、Anthony の願望を肯定するためのものでしかないのである。彼が女友達などにも説いて聞かせる、こうした形骸化した古い道徳的な考えは、Kate から見れば、その良さを認めつつも、もう終わってしまった <We're done.> (p.166) と云いうる英国の <moral conscience> (p.166) である。英国を過去として捨てることを選んでいる Kate には、<Although he had travelled half-way round the world in the last ten years he had never before been far away from England. He had always worked in places where others had established the English corner before he came> (p.88) と、世界のどこに在っても、英国らしさ、英国だけを追い求めてきた Anthony が、<absurd innocence>と云い得る存在なのである。それは、どこかつじつまの合わない、ばかばかしいほど英国にこだわる、Anthony の幼なく単純な言動を云い表わしている。そしてそれは、また、Anthony の内部にある矛盾するものをも表わしているのである。つまりⅡ章において述べたように、彼は一方では人生に何の意味も価値も認めず、生き続けるためにあらゆることを手段とし、相対化しなければならないのに、他方では英国を捨てきれず、幻のように憧れつづけている彼の流浪性と固着性とを表わしていると考えられるのである。

だが、Anthony の Kate や Krough に対する子供っぽいとしか云いようのない反抗は、その非情な実業界への反抗であるという意味で、現実 (experience) に対する子供 (innocence) の対立を表わしていることにもなる。それはこの現実の世界を成り立たせている、おとなの文明に潜んでいるまやかしに対する拒絶という、無力ではあるけれども、ひとつの告発という役割をもっていることになるのである。この、おとな (現実) の世界における子供の言動という点で、Anthony と Pyle は同じように周囲に波紋を及ぼす存在なのである。Anthony がおとなの世界で無力であり、その世界に拮抗する力としてはあまりにも無力であり、彼にはその意志すら認めがたいのに、最終的には企業の秘密を知ったという理由で、霧の中で殺されてしまったのに対して、Pyle の <innocence> は破壊的な暴力へと発展しているのが特徴である。Anthony と Pyle を比較するならば、Pyle にも、生命の賭けられている戦場において boyish であるという表現が多く用いられ、Anthony 同様、<too innocent to live> (p.26) という、周囲の世界とは相容れなく、その世界からはみ出してしまわねばならない存在として形象されているという共通性がある。周囲の世界から、はみ出してしまふ無鉄砲な Pyle の行動の背後には、現実の状況に対する無知と、その状況に自ら巻き込まれていく若さと愚かしさが認められる。Pyle は少年冒険談の主人公にでもなったつもりで、自分の行動の <the absurdity and the improbability> (p.123) に気づいていない。だから General Thé の、罪のないサイゴン市民を巻き込んだ無差別爆弾事件を咎めるときも、学校のスポーツチームのキャプテンのような口のきき方 <... I dealt with him very severely.' He spoke like the captain of a school-team who has found one of his boys breaking his training.> (p.195) をするのである。Pyle が事の重大さに気付いてほしいと願う、新聞記者 Fowler の期待を裏切ったこの態度は、赤い勢力による Pyle の謀殺への大きな契機となっているのである。このように Anthony と Pyle の子供っぽいという表現の背後には、現実に対する認識——それは現実の世界にはびこる悪意と、ひとつの世界を守るためには手段を選ばないという非情な姿勢に対する認識であるが—

一を欠いた存在であるという共通性がある。ところで Anthony と Pyle には、相違するところがあることもまた明らかである。両者共に自らの行動の規範というものは自覚されてはいるが、Anthony が古い世代の道徳観をそのまま受けつぎ、積極的な彼自らの人生の目標が無いのに比べて、Pyle には世界を改善するためのデモクラシーという、掲げるべき旗が明確にされているのである。だから Anthony は企業の不正に気付いたとき、脅迫という彼個人の利益追求という利己的な発想をしたのであるが、Pyle は目標の正しさを信じ続け、一直線に、手段を選ばず目標へと走り抜けようとする行動力、暴力へと発展しているのである。このように考えてくると、両者共に生命を失うという設定がなされてはいるけれども、彼らの子供っぽさ <innocence> ということから考えるならば、Anthony は negative の方向へ、Pyle は positive の方向へと働らく存在として考えることができるのかも知れない。

**

Anthony の <innocence> が negative の性質をそなえていることを表わしているもうひとつの表現が、<blank innocence> であると考えられないだろうか。それは、<innocence> そのものが演技によって虚構されているということであり、II 章でのべたように、Anthony が虚無という自己存在のリアリティから逃れるための、<self-deception> の一つの表われでもある。

Anthony は常に自分が周囲の人々に、どのように見えるかを知っている <He knew he looked well in evening dress> (p.109) のであり、また彼には、彼の内面さえも異常なほどに理解している Kate に対しても、<どの程度まで話せるかを計算した> (p.31) という、冷めた心の動きがある。このような自己に向けられた客観的な視線というものは、II 章において述べた虚構における演技ということの背後に、当然伴なわれているべき冷静な判断である。彼は Kate にも店のウェイトレスにも同様に、計算されあらかじめ用意された魅力的な視線 <calculated interest, calculated childishness,

a charm of which every ingredient had been tested and stored for future use> (p.23) を向けるのである。人の気持を自分に引き寄せるための、計算され演技されたこの魅力は、彼の世渡りの大きな手段である。そのことを十分に理解している Kate は、彼のそのような表情を <blank innocence> という。

Then he turned on her his expression of blank innocence, polished and prepared.

‘Oh, can’t you be yourself?’ Kate said. Tears of loneliness pricked behind the lids. She missed him painfully as he built up between them this thin façade of a fake respectability as she had missed him when he first went abroad (p.26)

(そのうち彼はふり向いて、いかにも無邪気そうなぼかんとした表情を彼女に見せた、磨いて用意しておいたのだが。

「ああ、あなたは自分自身にはなれないの」とケイトは云った。孤独の涙が陰の裏を刺した。彼が自分達の間、この薄っぺらな見せかけの儀礼的なお上品ぶりという建物を建ててしまうと、彼が初めて海外へ旅立った時に淋しさを感じたように、胸の痛むような淋しさを感じる。

他人をごまかしても Kate はごまかせない、Anthony の見かけだおしの建物の正面のような <磨かれ> <用意されている> <うつろな無垢> の表情。それは真実を隠すための、 <見せかけのお上品振り> であると Kate は見抜いている。ここに表われている <innocence> は、すでに失ってしまっている <innocence> を演技することによって保存したために、形骸化してしまった <innocence> であると考えられるのである。だから本来 <innocence> が伝えるべき意味内容は失われ、空しいのであると云わねばならない。対峙する Kate の眼にうつる、この空無であること、無意味であること、無関係であることは、Ⅲ章で述べたところの、Greene がアフリカのジャングルで認めた、人間にとって無関係な、無意味な原初の状

況を連想させないだろうか。ものごとの始まり、文明の萌芽としての innocence ではなく、相対する人間とは無関係なままで存在している単なるエネルギーとしての innocence が、この <blank innocence> に影を映してはいないだろうか。そのエネルギーは、人間の生存にかかわる価値がない²⁾、という意味で、虚無の状況でもあった。Anthony の真実をごまかそうとする <self-deception> の表情に、Kate は耐えられず <Oh, can't you be yourself?> と云っている。この <自分自身でありなさい> という Kate のことばに促されて、<僕には将来がない> という Anthony の真実 <self-knowledge>、つまり虚無の状況であるという認識が明らかになってきているのである。このような意味で、<blank innocence> は演技という虚構の鏡によって、Anthony の内部の虚無の状況が映し出されているとも考えられるのである。

こうした Anthony の演技という姿勢によって示される最も自覚的な <innocence> は、II章において述べたように、Pyle の <innocence is like a dumb leper who has lost his bell, wandering the world, meaning no harm> (p.40) に表われている無自覚な <innocence> と対称的である。Pyle の善意に基づく自己本位な発想、自らも含めて人間の内部に潜むごまかしや悪意に関する無知、これらに基づく積極性は、Anthony の手段化した <innocence> と比べれば、前述したように負と正とへ向う矢のように違っているとも云えるのである。この比喻表現について、Anthony の場合は、<But when he turned, his smile explained everything; he carried it always with him as a leper carried his bell; it was a perpetual warning that he was not to be trusted.> (p.10) という <smile> の比喻表現であったのに、Pyle の場合は人間像として比喻されている、という指摘³⁾もあるように、Pyle は無自覚であるために <innocence> そのものの存在として形象されている。だからその存在には、<Innocence is a kind of insanity.> (p.213) という判断が彼の行動に対して下されなければならないほど、その極端な原初性——文明と対立する力としての暴力——が positive なかたちで認められるのである。それはすでに失われたはずの

(彼は賢い、と専務取締役が書いていた、彼は計算にはすばらしい才能があります、特別に不満はありませんが、彼は事務所を墮落させるのです。)

具体的には、有能ではあるけれども、だらしがなく、私生活においてもいいかげんである Anthony の生き方を <corrupt> ということばで云い表わしていると考えられるが、それは換言すれば、会社の中での価値規準や規則を無視し、そして周囲をその状況に侵蝕してゆく言動でもある。既成の社会のなかでそのルールを無視することは、その秩序を混乱状態へと還元することになるのである。<corrupt> ということばが、Greene の作品においてまだ宗教的色彩の濃厚でない時期なので⁶⁾、このように理解できるとするならば、<depraved innocence> にも <absurd innocence> と同じように、矛盾する性向を認めることができるのである。つまり、スクール・タイに表象される既成の社会通念に素直に従いながら、偽のネクタイであるということによって、同時にその規範を否定し、破壊しているという相反する性向を認めることができるのである。ここにも、虚無に等しいような単なる生命の証明としてのエネルギーという innocence の一面を認めることができるのである。文明、伝統、或は秩序を支えるものとしての規範を根源の状況へと引きもどしてしまふ、innocence に内在する野蛮への、混乱への逆行性、あらゆることを秩序以前へとひきもどす力を知ることができるのである。これは Pyle について述べられた <Innocence is a kind of insanity.> の一つの萌芽と見なすこともできると考えられるのである。

さらに、偽のスクール・タイを身につけて、その同窓生になりすまして模倣の生活をするということは、自己本来の姿を捨てて、仮りの姿に身をやつすことであり、それはどのように上手に模倣をしても、決して自分の真実の姿と一致することはないのである。ひとりの人間がその内部に自らが認める真実と、その顔われとしての外見つまり行動とが一致したとき、まさに盲目になることを自らが選んだオディプス王のように、彼は初め

て、確実な確かさと誇りと尊厳とを示すひとりの人間として、周囲の人々の前に立ち現われることができると思われるのである。このような意味で模倣の生活からは、人間本来の、人間としての尊厳を失った結果、品性の墮落した、それ故周囲から見れば滑稽な姿が現われてくるだけである。このような模倣の故に周囲の人々の眼には滑稽にしか見えないような、自己の尊厳を放棄した人々にみられる道化性を、Greene は、アフリカの植民地でヨーロッパ化されつつある土着の人々のなかに見出し、*Journey Without Maps* のなかに記しているのである。

They wore uniforms, occupied official positions, went to parties at Government House, had the vote, but they knew all the time they were funny (oh, those peals of laughter!), funny to the heartless prefect eye of the white man. If they had been slaves they would have had more dignity; there is no shame in being ruled by a stranger, but these men had been given their tin shacks, their cathedral, their votes and city councils, their shadow of self-government; they were expected to play the part like white men and the more they copied white men, the more funny it was to the prefects. They were withered by laughter; the more desperately they tried to regain their dignity the funnier they became. (pp. 34-35)

(彼らは制服を着用し、官職につき、政庁で催されるパーティに出席し、選挙権がある、しかし彼らはいつも自分達が滑稽であること(ああ、どつとあがるあの笑い声)、白人の長官達の情容赦のない眼には滑稽であることを忘れることはない。彼らがもし奴隷であったなら、もっと威厳がたもてたであろうに、異国人に支配されることは少しも恥ではないが、これらの人々は彼らのトタン小屋を、彼らの寺院を、彼らの選挙権と市議会を、彼らの自治の幻の姿を与えられてきた、彼らは白人のように役割を演ずることを期待された、そして彼らが白人を模倣すればするほど、長官達には滑稽なのである。彼らは笑われて萎縮していた、彼らが威厳を取り戻そうと必死になればなるだけ、彼らは滑稽になったのである。)

フリータウンの町でヨーロッパ風のもののは全て醜く、美しいものは土着のものだけであると、Greene は述べながら、ヨーロッパ化された政治機構のなかで、ヨーロッパ風になることを、白人のように振舞うことを期待され、また自ら努力し、願う人々に、卒直な眼を向けているのである。白人を模倣すればするほど、彼らの尊厳が失われて、笑いの対象となってしまう。この耐え得ないような惨めな道化的な存在になっていく人々を、Greene は深い同情を示して眺めている。ここには、人は何にもまして、その人自身であらねばならぬ、借り物の衣装をまとして生きてはならぬという、人間を限りなくその独自性において尊重しようとする姿勢がうかがわれるのである。このような Greene の人間観に裏打ちされて、Anthony のスクール・タイが設定されているのであれば、<depraved>とは、人間が自己本来の姿を見失って、借り物の、まやかしの人生を生きのびてゆくときの、品位と尊厳を失っている惨めな状況をもその一面として内包しているとも考えられるのである。

しかし Anthony はその出身校ではないハローのネクタイを身につけることが、生きのびてゆく手段となることを知っているのも事実なのである。このネクタイを身につけているというだけで、好意や仕事を与えられる機会があるからこそ、彼はその同窓生であるという危い演技を続けているのである。この虚構と事実の狭間で、その境界線がぼけてゆくところで、生きのびるために虚構の幻想を生き続けている、Anthony と同じような人物に、*The Comedians* の一人物 Jones がある。Jones と Anthony が類似していることについては Kunkel も指摘している⁷⁾ のであるが、Jones も Anthony や Pyle と同様に、innocence ということばで表現されていることは興味深いところである。

I listened with astonishment. What could a saint possibly have in common with a rogue?...and I thought: innocence perhaps. (p.241)

(私は驚いて耳をかたむけた、いったい聖者と悪党とに、どんな共通点があり得るのだろうか。(中略)そして私は思った、おそらく無邪気という

ことだ。)

この場合、<innocence>は *The Comedians* の語り手である Brown によって、聖者と悪党の共通点として抽出されているのであるが、聖者とは善良なアメリカ人 Smith のことであり、悪党とは Jones のことである。聖者と悪党という水と油のような天地雲泥にも似た正反対の存在の背後に、その共通の資質として <innocence> があるという発見は意味深いことである。どちらの存在も、現実の世の中にあっては特殊な存在であるという意味で、はみ出し者であり、世の中から、はずれたところにその生の根拠を置いていることが、<innocence> であることの一つの意味であるのかも知れない。さらに Smith と Jones 両者共に、現実離れのした実現不可能に近い夢を抱き続けているという、一途な純情さを、この場合 <innocence> の意味として加えることも出来るかも知れない。Jones について考えるならば、<rogue> ということばで語られているように、その生きざまはいかがわしいのである。彼は <ペテンにかけて社会や人々をきりぎり舞いさせる放浪の悪党>⁸⁾ の一面をそなえている。Anthony や Pyle 同様周囲の人々に面倒を持ち込む <Anyone who touches Major Jones is in trouble.> (p.292) 存在である。Jones の言動は曖昧 <He wore his ambiguity like a loud suit and he seemed proud of it.> (p.42) で、嘘で固められた彼の過去に関する真偽は明らかではない。彼は常に自ら Major Jones と名のり、ゲリラ戦の体験者であり、優秀な指導者であると自ら語るが、事實は軍属の慰問団に関係していただけであったことが、終りに明らかになってくるのである。それにもかかわらず、Jones は Major Jones でありたいと願ひ、そうであるという演技を続け、その結果生命を捨ててしまうのである。

この演技ということについて Anthony と比べるならば、Anthony が自己保身のためにのみ虚構の世界で演じ続けたのに対して、Jones は自分の言動は演技であると自覚していながら、死をも演技化する、つまり自らの生命を人々の期待に応じて賭けることも結果として出来たことが Anthony

と異なるところである。この点、同様に innocent であるために生命を失うに到った Pyle とも異っている。Pyle も Anthony も自らの死を選びはしなかったが、Jones は<'Why are you dying, Jones?' 'It's in my part, old man, it's in my part...> (p.355) と、作品の最後で Brown の夢の場面で語ることによって、彼は自らの死を自らの役割として演じたことが暗示されているのである。ゲリラ達を逃亡させるために、扁平足のために身動きできないところに追い込まれていたにせよ、囮になった Jones の死は、現実には何の役にも立たない無駄な死であったという意味で、周囲の状況から判断すれば、その愚かしさは笑いの対象となるものである。観客から見れば、無意味な死を自意識過剰に演じた comedian にすぎないのである。しかしハイチのゲリラ達という弱者の世界においてではあっても、Jones は彼らにとっては、かけがえのない指導者であり、英雄であり、記念碑を建てるほどの崇拜の対称になり得たという点で、道化ぶりの本領である演技から実際的な責任のある行動へ⁹⁾ という過程は、悪党から英雄へ、英雄から聖者への変貌が暗示されているようである。世の中からはみ出し者としてのずる賢い悪党であり、同時にその純情さにおいて笑いの対象となる愚者であり、またその死については「^{スケープゴート}犠牲羊」という聖者の一面をそなえている Jones は、<あらゆる矛盾した称相が「道化」の現実の姿>¹⁰⁾ であるという意味で、道化の容貌をそなえているということが云えよう。彼は Brown の語る<Life was a comedy,... it seemed to me that we were all,... driven by an authoritative practical joker towards the extreme point of comedy.> (p.31) という、人間はすべて、人間を超えた存在である悪ふざけをする <joker> (神) が思うがままに操っている comedy の役者、comedian であるという意味で、comedian であると同時に、上述したように <fool> の面をもそなえているのである。だが Jones にとっては、現実のゲリラ戦に参加するという、世の中で、これが自分の居るべき場所という仕事をもつことは、終生の夢の実現でもあったのである。彼は生涯、世の中からはみ出し者という立場からの復帰を願い続けたのである。

I wondered whether perhaps in all his devious life he had been engaged on a secret and hopeless love-affair with virtue, watching virtue from a distance, hoping to be noticed, perhaps, like a child doing wrong in order to attract the attention of virtue. (p.329)

(彼の曲りくねった生涯を通して、おそらく彼は美德にひそかな、望みのない恋をしつづけて来たのではないのだろうかと思つた、たぶん、美德の注意を引くために悪戯をする子供のように、遠くから美德を見つめながら、気づいてもらうことを望みながら。)

眼をとめて欲しいばかりに悪戯をする <doing wrong> 子供のように、<virtue> という恋人を秘かに一生慕い続けた Jones。彼は虚と実の間のバランスを巧みにとりながら、危い橋を渡り、ウィットを手段として周囲に笑いをふりまきながら生きのびて、<virtue> に認められるという夢を追い続けたのである。嘘と不正ばかりという虚構の人生のなかで演技しつづけた彼を支えたのが、この一途な夢であったのかもしれないと云えるのではないだろうか。彼は、嘘と不正と演技という、間違つたことをする <doing wrong> という、人生におけるマイナス札ばかりを、死そのものに到るまで集め切ってしまったのである。つまり彼の願望の投影像であるところの自らに課した役割(虚像)を演じきって、実像としてしまったという意味で、トランプ遊びのように、マイナス札がそっくりプラスに変化してしまった存在であると云うことが出来るのではないだろうか。

Anthony も Jones も演技という借り物の人生を歩んだという意味で、<depraved innocence> という表現が与える、墮落しているがどこか憎めない、何か一途なものを秘めている悪党というイメージを共有しているのである。だが、Anthony の一途なところは自己の保身にのみ関わっていたのであるが、Jones は、ひどい岩場を<ここは良い場所だ>(p.355)と、自分の居るべき、そして死ぬべき場所として選ぶことによって、読者という観客の笑いの対象である道化ぶりという演技に徹することにより、その存在権を獲得したのであると考えられるのである。

V

全世界は私に生活費を払うべきだ〈All the world owes me a living〉という、この作品のエピグラフを体現している、ろくでなしの Anthony を〈innocence〉ということばを手がかりにして捕えようとするのが、この稿の目的であった。さて、II章において述べた Anthony の揺れ動く意識、即ち〈self-knowledge〉と〈self-deception〉の間を揺れ動く心理を具体的に表わしているのが、〈absurd innocence〉〈blank innocence〉〈depraved innocence〉であると考えられるのである。それは彼の絶えず二つの方向へと向う資質がこれらの表現のなかに認められるということであり、流浪性と固着性と、虚無と演技と、秩序肯定と秩序否定というアンビヴァレンスの資質である。これは、あらゆることが相対化される〈a closed world of nihilism〉¹⁾の代表的住人であることを如実に物語るものでもある。

さらに Anthony と Pyle と Jones について、〈innocence〉という点から考えるならば、〈innocence〉という座標軸の原点として、Anthony の位置を定めることができるのではないだろうか。つまり彼は positive にも negative にも契機しながら、その二方向が相殺されているという意味で、0 という位置を定めることができると考えられるのである。Pyle については、この座標軸の上では positive の位置を、その自己充足と自己肯定のゆえに定めることができるし、Jones は反対に冷めた自己否定と演技という虚構性のゆえに、negative の位置を定めるのではないだろうか。この Pyle と Jones の位置関係は、さらに、その〈innocence〉の功罪ということにおいては、Pyle は negative に、Jones は positive へと逆展開することが考えられるのである。

注

1) G. Greene: *The Comedians*, 1966. 文中では The Bodley Head & William

Heinemann, 1976 年版を使用している。

- 2) 岩波小辞典「哲学」：ニヒリズム
- 3) Manly, Jane Burt, *Graham Greene: The Insanity of Innocence*, University Microfilms. Inc., Ann Arbor, Michigan, 1970, p.64
- 4) 「イギリスと日本」, 森嶋通夫著, 岩波新書, 1977, p.113
- 5) Kenneth Allot and Miriam Farris, *The Art of Graham Greene*, Russell & Russell. Inc, 1963, p. 108
- 6) David Pryce-Jones, *Graham Greene*, Oliver and Boyd, 1973, p.22
- 7) 「グレアム・グリーン研究 I」, F. クンケル著, 野口啓祐編訳, 南窓社, 1974 p.231
- 8) 「知の祝祭」, 山口昌男著, 青土社, 1977, p.295 ジョージ・ヴィクターについての解説。
- 9) 「道化の文学」, 高橋康也著, 中公新書, 1977, p.151
- 10) 同上, p.14
- 11) 注6)に同じ, p.26